

## スポーツの推進と財政

中 嶋 則 夫

### はじめに

平成23年にスポーツ基本法が制定・施行され、平成24年には、その法律に従い、スポーツ基本計画が策定され、すでに平成29年度で5年が経過している。この法律によりスポーツの推進に予算を設け、多くの人々がスポーツにかかわる機会を増やそうという政策である。そのスポーツとは、カイヨワ（2013）によれば、遊びの一部であり、玉木（2001）では、非暴力化された競争や闘争をゲーム化したものであり遊びであるとしている。このようなスポーツを推進する政策が、財政の役割を果たすものであるのか、また、そのために注意すべき点が無いのかについて、本稿では次のように議論する。

まず、第1章で、神野（2003）を参考に、市場社会における財政の役割を、市場社会の成立過程とそこに生まれる3つのサブシステムの関係性から明らかにする。そこでは、市場的人間関係と非市場的人間関係が存在することにより、経済システムの市場化以前の前市場社会で保障されていた、生活保障機能が市場を通じて調達されるように変化することが明らかになる。また、どのような財・サービスが生活保障機能を保障するのか、それらをどの程度の規模で調達する必要があるかなど、多様な意見が存在し、それらを調整・集約し決定しなければならない。その多様な意見の背後にある、判断基準としての原則、つまり配慮すべき様々な正義について、サンデル（2010）が挙げる幸福・自由・美徳を参考に議論を展開し、正義の実現に向けて、われわれが従う法律との関係が示される。

また、公的部門が、市場で調達する社会的に必要な財・サービスが正義にかなっているのかどうかや、それらが正義にかなうためには何が必要であるかについて、サンデル（2010）が示す、正義に至る道徳的考察の方法を参考に議論する。そこでは、配慮すべき様々な正義を調整し集約する際、先入観や決まりきった日常生活で信じられているたたき台としての意見や信念も必要であることを指摘する。

第2章では、まずスポーツ基本法の制定に関する経緯として、国は財政によりスポーツを推進するために、昭和36年に制定されたスポーツ振興法を50年ぶりに全面改正し、平成23年にスポーツ基本法を制定・施行し、平成24年には、その法律に従い、スポーツ基本計画を策定した点を紹介している。この改正により、スポーツの推進がなされ、われわれがスポーツにかかわる機会が増える中、その政策で何が得られるのか検討する。法律の前文には、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことはすべての人々の権利とした上で、スポーツが担う役割は、青少年の健全育成、地域社会の再生、心身の健康の保持・増進、社会・経済の活力の創造、我が国の国際的地位の向上に集約され、国家戦略としてスポーツに関する施策を総合的かつ計画的に法律に従い推進し、スポーツ立国の実現を目指すとする。法律の前文では、遊びの一部であるスポーツを推進することで期待されることが示されているが、遊びのどのような原理が本能に満足を与えるのかについて、カイヨワ（2013）を参考に、明らかにし、併せて、本能に満足を与える事と遊びと現実との区別があいまいとなることが原因となり、遊びの堕落が生じることについても考察する。その結果、スポーツの推進が法律の趣旨の実現に支障となる可能性が指摘され、すべての関係者が配慮すべき事柄を指摘する。また、スポーツにかかわる機会の増加により、スポーツをするための個人の能力差が結果の違いを顕在化させる機会の増加につながる。スポーツの特性上、「どの競技者にとっても、一定の分野で自分の優秀性を人にみとめられたいという欲望」（カイヨワ、2013、pp 46-48）があるため、能力の違いを各自がどのように理解すべきであるか

について考察することが必要である。その考察を通じて、能力あるものがそれを伸ばすために協力してくれた他者の存在を認識する必要性について、サンデル（2010）を参考に指摘し、そのことが、他者への尊重や協同する精神の涵養につながる点について言及する。

## 1. 市場社会における財政

以下では、神野（2002）に従い、政治システムの民主化、社会システムの共同体的慣習からの解放による経済システムの市場化で、人間の欲望の充足が図られ、市場的人間関係が生まれ、生活保障機能の供給方法が変更を迫られることを説明する。まず、政治システムは市場を活用した生活保障機能の補助に向け多様な人々の利害調整が必要となることを示し、市場的人間関係で不足する、生活保障機能を財政が担うという市場社会の特徴を明らかにする。それに続いて、サンデル（2010）を参考に、道徳的真理を正義とし、行動を伴う自分の判断と支持しうる原則の一致を追求することが正義にたどり着く手段であること、幸福、自由、美徳がその切り口であること、更に、経済的繁栄が幸福との関係から優先的に議論されることの理由を示す。そこには両立しない正義が存在するが、当事者らが議論を通じて合意形成に至る可能性があることを紹介する。これらの議論を踏まえ、多様な人々の利害調整により編成される予算によって市場社会における財政が、その役割を果たすことを示す。

### 1.1 欲望を充足する市場社会の成立過程

神野（2002）は、市場社会の成立過程とその成立による生産性の向上を以下のように説明する。

「市場社会が成立するためには、被支配者が支配者になるという政治システムの民主化を前提にして、被支配者が生産要素に私的所有権を設定することが認められなければならない。」（神野，2002，p 23）

これで、生産性に応じた資源の最適配分が可能となり、移動が可能となる労働力は、生産・分配・消費のため空間を移動するようになる。政治システムの民主化により残された機能は、以下のように示されている。

「被支配者が支配者になったとしても、強制力にもとづく支配・被支配という政治システムは存続しなければならない。要素市場が機能するには、生産要素に私的所有権を設定しなければならないが、私的所有権を設定し、保護するには強制力が必要だからである。」(神野, 2002, p 24)

政治システムは、生産要素市場のみの私的所有権の保護ではなく、財サービス市場での取引にも保護が必要であり、社会の秩序を維持する役割を担う。このような政治システム下で、欲望を充足する財サービス生産が次のように実現する。

「財・サービスの生産と分配は、強制力にもとづく指令や情緒的紐帯にもとづく共同体的慣習によらずに、市場における等価交換にもとづいて実施される。／…経済システムが分離する市場社会になると、社会的余剰は…さらに余剰を生むために使用される。」(神野, 2002, p 24)

経済システムの市場化に伴い、分業が進み、生産性の向上で、社会的余剰が生まれ、それは更なる生産性の向上に使用され、その結果、欲望の充足が可能となる。

## 1.2 生活保障機能の減退する市場社会の市場的・非市場の人間関係と財政

神野(2002)は、市場社会の成立により、生活を保障する機能の減退が生じることを、以下のように示し、民主化された政治システムが、多くの利害を調整し、市場化された経済システムを活用して減退した生活保障機能の補助を行う必要がある点を指摘している。

「(市場社会では) 政治システムの機能は、社会秩序を維持し、社会を統合していく任務に限定され…経済システムが分離したのだから、財・サービスの生産と分配にかかわる管理機能は…抜け落ちている。／…もちろん、経済システムは社会システムからも分離し、共同体的慣習から解放される。しかし、…社会システムが存在しなければ、人間は生存することができないため、社会システムも存続する。／…政治システムが民主化されることにより、社会システムも領主の指令という拘束から解放され、政治システムからも分離している。しかし社会システムと政治システムが一体化していた前市場社会では、社会システムの中で営まれる人間の生活は、政治システムによって保障されているのだが、市場社会ではそれは希薄化していく。」(神野, 2002, p 24)

神野(2002)は、3つのサブシステムからなる市場社会に暮らす人々の関係性には、市場的人間関係と非市場的人間関係があり、財・サービスの取引が、有償、無償で適宜行われ、より良い社会の形成を目指していることを指摘している。より良い社会を形成するには、等価交換に基づく市場的人間関係のみでは実現せず、前市場社会から存在する共同体的人間関係による社会システムによって人々の生存を維持しながら、膨れ上がる欲望を充足するために、市場を活用した経済システムと、生産要素に設定された私的所有権の保護などを含む統治活動を、強制力を持つ法律を用いて行う、強制的人間関係を基礎とした政治システムが必要となる。

市場社会では、膨れ上がる欲望の充足のために、経済システムを、社会システムおよび政治システムから分離するため、市場における経済活動は、社会システムの共同体的慣習から解放され、政治システムも民主化されることにより領主の指令により保障されていた社会システムの中での人間の生活の保障が希薄化していくと言う。このような市場社会における人間の生活保障に役割を果たし、社会を統合する公的貨幣現象が財政であるとしている。

### 1.3 正義に至る道徳についての考察と財政

市場社会において人間の生活を保障し、膨れ上がる欲望を充足できるようにするには、民主化された政治システムが正義の実現に向けた役割を果たすことが必要となる。サンデル（2010）は、正義を、行動を伴う自分の判断と支持しうる原則の一致を追求するという道徳についての考察により、到達するであろう、道徳的真理のことであるとし、さらに、社会を構成する人々が合意に至る正義が何か、を考える際、対話と議論が重要な役割を果たすと言う。

神野（2002）は、社会を統合する公的貨幣現象が財政であり、政治システムはその財政を通じて、市場化した経済システムと市場化に伴い生活保障機能が減退した社会システムに対して公共財・公共サービスを提供し、その代価として経済システムから貨幣を調達し、社会システムからは、その代償としての忠誠<sup>1)</sup>を調達するとしている。民主化された政治システムは、「社会システムで営まれる人間生活に必要な、財・サービス」（神野、2002, p 28）を市場化された経済システムから調達できなければ、人々からの忠誠を得ることはできなくなる。そのため、多様化・複雑化した利害は議会が予算を通じて調整し、財政をコントロールしなければならないと神野（2002）は述べている。財政をコントロールする予算に、正義に合う項目が盛り込まれることにより、民主化された政治システムは人々からの忠誠が得られ、社会の統合が可能となる。

### 1.4 経済的繁栄とその他の道徳的議論

経済的繁栄が優先的に議論される理由として、経済的繁栄の促進、生活水準の向上、経済成長の支援が人びとの幸福に貢献するからであると、サンデル（2010）は以下で述べている。

「現代の政治的議論のほとんどは、経済的繁栄の促進、生活水準の向上、経済成長の支援に関するものだ。我々がこうした問題に気を配るのは

なぜだろうか。…経済的に繁栄しているほうがそうでない場合よりも、個人としても社会としても都合がいいと信じているから、というものだ。換言すれば、経済的繁栄が重要なのは、それが人びとの幸福に貢献するからなのだ。」(サンデル, 2010, p 29)

また、市場社会において、経済的な繁栄に関する議論と両立しない道徳的な問題が生じることがあり、何を基準に皆が従うべき法律を制定し、我々の行動を一定範囲に規制すべきかなどが議論となる。公的貨幣現象である財政では、前市場社会から存在する非市場の人間関係で提供されている人間の生存を保障する財・サービスのうち何を市場から調達し、無償または廉価で提供すべきかが議論となる。その議論の際、サンデル(2010)は意見の集約ができないのではないかという不安を以下のように表現している。

「社会生活において道徳問題が論じられる際の熱意や激しさを考えると、われわれの道徳的信念はしつけや信仰によってしっかりと植えつけられており、理屈を超えているのだと思いたくなるかもしれない。」(サンデル, 2010, pp 40-42)

しかしながら、サンデル(2010)は、議論を通じて、理屈を超えていると思われる問題への政策の合意形成可能性とその手法の重要性を「議論を通じて人々の考え方が変わることもあるのだ」(サンデル, 2010, pp 40-42)と述べている。

このように、合意形成に向けて議論することが重要であるとし、また、議論を始める際、いかに偏っていて素朴なものであろうとたたき台としての意見や信念が必要となるとサンデル(2010)は以下のように示している。

「正義の意味や善良な生活の本質を把握するには、先入観や決まりきつ

た日常生活を乗り越えなければならないということだ。…道徳をめぐる考察が弁証法的プロセスを踏む—つまり具体的状況における判断と、そうした判断の土台となる原則のあいだを行ったり来たりする—なら、いかに偏っていて素朴なものであろうと、たたき台としての意見や信念が必要となる。」(サンデル, 2010, p 42)

議論を尽くし、市民生活に命を吹き込む理念のもと、われわれの共同生活に影響を与える法律ができることで、幸福で豊かな生活を営むことが可能となる。

「道徳をめぐる考察が政治に向かうとき、つまり、どんな法律がわれわれの共同生活を支配すべきかを問うとき、市民による騒動は避けられない。…そうした論争を通じてわれわれは、道徳的・政治的信念を明瞭にし、正当化する—しかも家族や友人だけでなく、同じ市民という要求の厳しい仲間のあいだにおいても。／だが、それ以上に要求が厳しいのが、古代から現代までの政治学者の面々である。彼らはときには過激で人を驚かすような方法で、市民生活に命を吹き込む理念について考え抜く。」(サンデル, 2010, pp 42-43)

公的部門は、どのような項目を社会的に必要な財・サービスであるとして予算化し、そのための経費を誰に、どのように負担してもらうかを決め国民の承認を得なければならない。しかしこれらの負担は、個人の支出可能な私有財産を減じることにつながるため、市民の中に騒動が生じる。政策とそれに必要な経費負担及び個人の経済的繁栄についての多角的な議論を行い、多様な意見を集約する必要がある。

以上の議論から、市場社会における民主化された政治システムは、社会システムと経済システムに配慮し、正義に適う項目が示された予算を通じて財政をコントロールすることにより、人々から忠誠を獲得することが可



能となる。正義とは、道徳的真理であり、行動を伴う自分の判断と支持しうる原則の一致を追求することを通じて到達の可能性は高まる。そこには経済的繁栄から得られる幸福をはじめとする様々な正義があり、人々が合意できる正義に至るには、たたき台となる意見や信念を出発点にして、騒動を伴う対話と議論が必要になることが示された。

## 2. スポーツ基本法が財政を通じて市場社会にもたらすもの

ここでは、スポーツの推進を謳ったスポーツ基本法の趣旨を確認し、玉木（2001）およびカイヨワ（2013）を参考に、スポーツの生まれた背景とその特徴、およびスポーツと遊びとの関係を明らかにする。さらに、「するスポーツ」、「見る・見せるスポーツ」を推進する際、カイヨワ（2013）の言う遊びの墮落に配慮する必要がある点にも言及する。さらに、遊びの墮落に対する必要な政策的配慮について、財政の役割とあるべき社会像に照らして検討し、スポーツの推進は財政の役割や正義の実現に、どのように機能するか議論する。また、個人間にスポーツを行う能力の差異が存在するため、その能力の道徳的恣意性に起因する結果の差異に配慮が必要であることの重要性についてもサンデル（2010）を参考に議論を行う。そこで、他者を尊重しそれらと協同する精神の重要性を示す。

### 2.1 スポーツ基本法の趣旨と財政の役割

よりよい社会の形成に向け、国は財政によりスポーツを推進するために、スポーツ振興法を50年ぶりに全面改正し、平成23年にスポーツ基本法を制定・施行し、平成24年には、その法律に従い、スポーツ基本計画が策定された。法律の趣旨はその前文にあり、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことはすべての人々の権利とした上で、スポーツが担う役割は、青少年の健全育成、地域社会の再生、心身の健康の保持・増進、社会・経済の活力の創造、我が国の国際的地位の向上に集約され、国家戦略としてスポーツに関する施策を総合的かつ計画的に法律に従い推進し、スポーツ立

国の実現を目指すとしている。そのスポーツの推進に伴う経費を、財政が支出することになる。

## 2.2 優劣を決める暴力的競争や闘争と非暴力的なゲームとしてのスポーツ

財政により推進される、スポーツとは遊びの一部である。そのことを、玉木（2001）はスポーツは、生存競争の原則をゲーム化し、非暴力的に身体で表現する文化であるとし、それを次のように示している。

「スポーツは、優勝劣敗という生存競争の原則をゲーム化したもので、身体を用いた『遊びの文化』として発展しました。これを、歴史家ノルベルト・エリアスは、『歴史に生じてきた非暴力文化（文明化）の傾向を、直接身体で表現する実践の形式』と表現しています。」（玉木, 2001, p 16）

また、同氏は、優勝劣敗という生存競争や闘争を非暴力的なゲームとして遊ぶようになったとし次のように述べている。

「人類の過去の歴史では、暴力的に力の強い者（戦争に勝つ道具や兵士を有している者）が支配者となったのに対し、文明化の歴史とともに、民主制や議会制という制度が生まれ、非暴力的に支配者が選ばれるようになったわけです。そのような非暴力化の歴史の中で、スポーツという身体文化は過去の優勝劣敗という暴力的な競争や闘争をゲームとして遊ぶようになった、というわけです。」（玉木, 2001, p 16）

さらに同氏は、スポーツを、語源から紐解き、基本的に日常から離れた余技、余暇であり、遊びであるとし次のように述べている。

「sports とは、…日常から離れた『余技』『余暇』『レジャー』といっ

た意味の言葉で／…日常生活の労働から離れた『余技』や『余暇』はすべて『スポーツ』で、実際、ヨーロッパでは、チェスやチェッカーといったゲームもスポーツととらえている国も少なくありません。『スポーツ』とは基本的に『遊び』と言えるのです。」(玉木, 2001, p 25)

以上から、スポーツとは、優勝劣敗を決める方法として存在していた暴力的な競争や闘争を非暴力的なゲームとして日常生活の労働とは離れたところで行うようになった遊びであると言える。

### 2.3 「するスポーツ」「見るスポーツ」「見せるスポーツ」と遊びの原理

スポーツは遊びであり、遊びはわれわれの生活を豊かにする文化であることを前節では議論した。その遊びとはどのようなものであるか、カイヨワ(2013)は遊びの原理に、以下のようなアゴン、アレア、ミミクリ、イリックスの4つの要素があるとしている。

「規則のある競争において、自分の能力だけによって勝利を得ようとする野心(アゴン)、運命の判決を不安と受け身の姿勢で待つために、意思を捨てること(アレア)、他人の人格を装う好み(ミミクリ)、および眩暈の追求(イリックス)の四つがある。」(カイヨワ, 2013, pp 90-91)

これらは、われわれの本能に応じる形で存在し、一定の範囲の中で、われわれに満足を与えてくれるものである。「するスポーツ」は、これらのうちアゴンからの満足を得ようとする遊びと言える。

「見せるスポーツ」を市場で取引される質の財・サービスまで高めたものがプロスポーツと言える。「見せるスポーツ」は、それを観戦する観衆・見物人にとっては、「見るスポーツ」であり、そこで選手と同一化するミミクリとミミクリを通じた競争となる第2のアゴンが生まれる。これをカ

イヨワ（2013）は、次のように述べている。

「すべてのアゴンは、それに参加しない者にとっては、一つの見世物である。ただし、模擬を排除しているというところに価値のある見世物である。それにもかかわらず、大きなスポーツの試合はミミクリの絶好の機会である。…すなわち、競技者が真似るのではなく、観衆が真似るのである。選手との同一化は、それだけでもすでにミミクリを構成する。これは、読者が小説の主人公の中に、観客が映画の主人公の中に自分を見出す原因となっているミミクリと同種のものである。…／…観衆はひいきの選手の努力に対して、…声と身振りで応援するだけでは満足しない。肉体的な感染の結果、彼らは人間…を助けようとして、それらと同じ姿勢をとるようになる。…観衆の内部に、見世物とは別にミミクリによる競争が生まれる。この競争は、グランドやトラックでの本当のアゴンと並行した第2のアゴンだ。」（カイヨワ、2013, pp 58-59）

また、大竹（2007）で取り上げられた戦力均衡に関する「ルイス＝シュメリングの逆説」<sup>2)</sup>のように、「見せるスポーツ」は勝敗に関するチャンスは均等が前提であるので、アゴンの結果は不確かとなり、それは、アレアの対象となる。つまり、見物人は、自らの能力によらない勝負の結果から得られる幻覚に身をゆだねることとなる。見物人は、競技者に勝負の始めにチャンスの平等が与えられているアゴンの不確かな結果を前提とする「見るスポーツ」から満足を得る。それをカイヨワ（2013）では、次のように述べている。

「競争者のチャンスは原則としてできるだけ均等にしてあるのだから、アゴンの結果は必然的に不確かであり、逆説的だが、純然たる偶然の結果に近づいてくる。そのため、理想的な規則のある競争という性格

を持つあらゆる戦いは、賭け、すなわちアレアの対象となりうる。」  
(カイヨワ, 2013, p 52)

「するスポーツ」の実践者である競技者は勝利のみを全力で追求する戦士のように振る舞い、消費者である見物人を魅惑する点において、前者はアゴンに対応し、後者では競技者は常に絶え間ない創作者役になりきるというミミクリにも対応しながら、勝利に向けあらゆる手段を駆使する。

以上のように、スポーツの推進により、「するスポーツ」、「見るスポーツ」、「見せるスポーツ」に接する機会が増え、われわれが豊かさを多く享受できる環境が整うことになる。

スポーツは遊びに含まれ、その遊びは、人間の本能を満たす4つの範疇から構成されている。本能を満たし満足を与える遊びは、自然に受け入れられる可能性が高く、財政がスポーツを推進することも遊びと同様に、われわれに受け入れられやすい。

#### 2.4 遊びの墮落のスポーツ推進への影響

遊びの原理は、アゴン、アレア、ミミクリ、イリンクスの4要素から構成され、遊びは本能を満たし満足につながるため、その遊びにわれわれは無条件に引き寄せられる。その意味において、財政がその推進に経費を支出することは、幸福という点で正義になっている。

一方で、本能が満たされ、楽しいが故に行き過ぎること（遊びの墮落につながることも）もあり、遊びの範囲にとどまるよう自らの欲求を抑制することも必要であるとカイヨワ（2013）では指摘されている。このように、われわれに満足を与えるこれらの遊びは、自然に受け入れられるものである。ルールの下、本能をコントロールする能力を、個人が身に付ける必要がある。

遊びには、限定された範囲、守るべき規則が存在する。それが守られない場合、遊びの墮落、つまり、本能の現実への適用が起り、混乱が生じ

る。また、遊びに対する心的態度が、その遊びの範囲を超え、別の遊びに変容してしまうこともある。カイヨワ（2013）では、アゴン、アレア、ミミクリという3つの要素<sup>3)</sup>に生じる遊びの墮落に該当する諸点を考察している。

#### 2.4.1 アゴンについて

まず、アゴンについての例である。競技者は、勝利に向けあらゆる手段を駆使するが、その手段に、ルールに反するものも含まれる。競技者として勝利を求めるあまり、不正を行うこともあり、これは遊びの墮落と呼ばれる。それを、カイヨワ（2013）は次のように述べている。

「アゴンの場合、現実に移されると、成功だけを目的とするようになる。公正な競争の規則は忘れられ蔑視される。規則は窮屈で偽善的な約束事にすぎぬと見なされる。仮借のない競争がしっかりと根を張る。卑劣な攻撃も勝てば正当化される。」（カイヨワ、2013、p 105）

このように、アゴンに対応する本能は、成功だけを目的とするようになる危険性<sup>4)</sup>を持っている。アゴンは、勝ちという成功だけを目的にし、手段を問わない態度として表れる。また、玉木（2001）で紹介されたように、スポーツは、優劣を決するための競争や闘争の暴力性を非暴力化したゲームであるが、スポーツ実施時の指導者や競技者からの体罰・暴力の存在は、遊びの墮落に該当するといえる。

この事態に対処するために、スポーツの推進と合わせて、指導者・競技者・関係者の美徳の涵養が必要になる。つまり、勝敗を決する際に、勝敗より優先して大切にすべきことを認識しかつ実践できる者が立派な競技者であることを指導者・競技者・関係者が重要なことであると知っている必要がある。ここにスポーツが美徳の涵養に関係する部分がある。そのことを、カイヨワ（2013）では、美徳を有する競技者を含めた遊戯者についてについて次のように示している。

「立派な遊戯者とは、たゆまず努力をした結果が失敗に帰するのを、あるいは法外な掛け金が無に帰するのを、他人事のように少なくとも表面的には冷静に直視できる人のことである。」（カイヨワ、2013、p 94）

さらに、同様のことを、レイナー（2013）では、スポーツが美德の涵養にどのように作用するかを次のように示している。

「スポーツを通して、若者は道德観を養うことができる。若者は人生の道德律に代えられる基本的倫理をスポーツによって学ぶことができる。勝つことで評価される競技スポーツは、高い道德的成長の機会を与える。…／…大切な勝利を犠牲にしてまで適切な道德的判断をするということは、真の人格テストとなり、そしてそれは人格を養う良い機会である。」（レイナー、2013、p 18）

勝敗や優劣を競うアゴンでは、競技者には等しくチャンスが与えられることで、勝利者の勝利に明確で疑問の余地のない価値が与えられる。このことで自分の優秀性を人にみとめられたいという欲望が満たされる。しかし、成功だけを目的とすれば勝利者となっても自らの優秀性は担保されなくなる。これらのことは、スポーツを推進する場合、すべての人々の間で共有しておくべきこととなる。

#### 2.4.2 アレアについて

アレアについての例として、偶然の結果を予知し恩恵を勝ち取ろうとする姿勢や、努力をせず外部の力に身を委ねるという姿勢に次のようなものがあると、カイヨワ（2013）は述べている。

「偶然の遊びの原則についても、…遊戯者が偶然を尊重しなくなれば、この墮落は始まる。すなわち、偶然を、個人を超えた中立の、感情も記憶ももたぬ力、運の配分をつかさどる法則の純粹に機械的な結果と

は考えない場合である。…運命に身を委ねている者にとって、その判決を予知し、その恩恵を勝ちとろうとするのは、じっさい誘惑的である。」(カイヨワ, 2013, p 94)

「熱心に運命の恵みを求める現象についていえば、それはおそらく現代の生存競争が要求する不断の緊張の代償であろう。自分自身能力に見切りをつけた者は、運命を当てにようになる。過度に厳しい競争は、意気地なしを失望させ、外部の力に身を委ねたい気持ちにならせる。天が彼にさずける幸運を認識し、これを利用することによって、自分の素質や、懸命の努力や、忍耐強い勤勉ではとても得られそうもない報酬を獲得しようとする。甲斐のない苦勞に固執するよりも、トランプや運命の星に、仕事がうまくゆく時期を知らせてくれと彼は願う。」(カイヨワ, 2013, p 97)

アレアに対応する本能は、偶然であり機械的な結果を予知し恩恵を勝ち取ろうとしたり、運命の恵みを熱心に求めようとし、自分の能力や努力には期待しない姿勢につながったりする危険性を持っている。アレアは、能力があっても外部の力に委ねてしまい、最善の努力をしない態度として表れる。薬物に依存することなどは、アゴンとの関係性の中で生じる遊びの墮落の一種と言える。

この事態に対応するため、高いレベルで競い合うプロなどの競技選手の心構えなどを学ぶことは、このような態度の抑制に有効に機能すると考えられる。また、最善を尽くし、結果を受け入れる態度を身につける方法であると考えられる。さらに、スポーツを市場の取引に値する財・サービスにすることは、スポーツの推進により、その分野に能力があり、かつその能力を開発し、それを職業として選択しようとする人にとって望ましい社会の形成であり、懸命な努力や忍耐強い勤勉に目を向けさせ、運命にすべてをゆだねるというアレアの墮落を防ぐ一助となる。



### 2.4.3 ミミクリについて

ミミクリについての例には次のようなものである。

「ミミクリの墮落も、(アレアと) 類似の道をたどる。…彼は自分が扮するこの他者をもはや演じていない。彼は自分を他者であると信じ、それに従って行動し、本当の自分を忘れる。…この自己喪失は、他人の個性を借りる楽しみを遊びの範囲内に抑えられないものに対する罰なのである。」(カイヨワ, 2013, p 97)

自分自身が 成功だけを目的とする個人になることなどもこの範囲に含まれると思われる。これに対応するため、自らの能力の限界を知るとともに、能力の道徳的恣意性を認識し、遊びの範囲内で他人の個性を借りて楽しむように努める必要がある。

## 2.5 能力に関する道徳的恣意性に関する議論

スポーツを推進する際に、重要となるのは、勝敗の決まり方とその時点での技量の関係である。様々な状況を背景に持つ個人は、スポーツの推進に伴い、機会が提供されても、その競技に同じ条件で参加し競争できるようになっていない可能性がある。機会の形式的平等が保障されているに過ぎない。真の機会の平等のためには、才能を伸ばす機会が保証される必要があるとサンデル (2010) はいう。しかし、その才能を伸ばす機会が平等に保障されても、生来の能力や才能は、それを保有する本人の手柄ではなく道徳的偶然の産物と言える。このようにスポーツを楽しむ際、個人間での能力の差異が存在するため、能力の道徳的恣意性に起因する結果への配慮の重要性について認識を深め、他者を尊重しそれらとの協同の成果を分かち合うことの大切さについてサンデル (2010) では以下のように示している。

「天賦の才の持ち主には、その才能を訓練して伸ばすように促す」と

もに、その才能で生み出した報酬は、共同体全体のものであることを理解してもらう…。足が速いのなら、…ベストを尽くせるようにする。ただし、勝利は自分だけのものではなく、そのような才能を持たない人々とも分かち合う必要があることを前もって確認しておく。」(サンデル, 2010, p 203)

自らの才能を伸ばすために協力してくれた他者の存在をしっかりと認識し、その成果を一人で獲得したのではなく、共同体全体のものであることを、誰もが知っておく必要がある。

## まとめ

市場社会における民主化された政治システムは、社会システムと経済システムに配慮し、正義に適う項目から構成された予算を通じて財政をコントロールすることにより、人々から忠誠を獲得することが可能となる。そこには経済的繁栄から得られる幸福をはじめとする様々な正義があり、人々が合意できる正義に至るには、たたき台となる意見や信念を出発点にして、騒動を伴いながらも非暴力的に進められる対話と議論が必要になる。

スポーツ基本法で謳われている法律の前文には、スポーツの推進が青少年の健全育成、地域社会の再生、心身の健康の保持・増進、社会・経済の活力の創造、我が国の国際的地位の向上に寄与する手段として示され、社会システムや経済システムへの影響に配慮する姿勢がうかがえる。スポーツがその役割を果たし、われわれが幸せで豊かな生活を営むためには、スポーツが意図された通りに効果を上げられるように推進される必要がある。スポーツは遊びの一部であり、遊びはわれわれの本能に働きかけ、満足を与えてくれる、文化の一部であり、その推進は、われわれにとって受け入れられやすいと言える。しかしながら、スポーツが遊びの墮落の影響を受けければ、スポーツ基本法で謳われている法律の前文に示されたスポーツが担う役割を果たすことができなくなる可能性が出てくる。非暴力的なゲー

ムとしてのスポーツを前提に、「するスポーツ」「見るスポーツ」「見せるスポーツ」で生じる遊びの墮落との関係には注意しなければならない。スポーツの推進の際、我々は、遊びには範囲があり、それを越えることで生じる遊びの墮落がどのようなものであるかを知っておく必要がある。勝敗や優劣を競うアゴンでは、競技者には等しくチャンスが与えられることで、勝利者の勝利に明確で疑問の余地のない価値が与えられ、自分の優秀性を人にみとめられたいという欲望が満たされる。しかし、成功だけを目的とすれば勝利者となっても自らの優秀性は担保されなくなる。アレアは、能力があっても外部の力に委ねてしまい、最善の努力をしない態度として表れる。薬物に依存することなどは、アゴンとの関係性の中で生じる遊びの墮落の一種と言える。勝利のみを全力で追求する戦士のように振る舞い、消費者である見物人を魅惑する点において、前者はアゴンに対応し、後者では競技者は常に絶え間ない創作者役になりきるというミミクリにも対応しながら、勝利に向けあらゆる手段を駆使するが、それが遊びの範囲を超え、日常生活にまで拡大すれば、遊びの墮落となる。また、スポーツをする際、個人の置かれている状況によって、スポーツへのかかわり方は異なるであろう。勝敗の決まり方にはその時点での技量が関係している。様々な状況を背景に持つ個人は、スポーツの推進に伴い、機会が提供されても、その競技に同じ条件で参加し競争できるようになっていない可能性があり、機会の形式的平等が保障されているに過ぎない。真の機会の平等のためには、才能を伸ばす機会が保証される必要があるが、その才能を伸ばす機会が平等に保障されても、生来の能力や才能は、それを保有する本人の手柄ではなく道徳的偶然の産物と言える。そのような個人の事情、他者を尊重できる姿勢を持つ必要がある。遊びであるスポーツがその墮落による現実社会への影響とスポーツの推進により得られる成果が、生来の能力や才能が道徳的偶然の産物であることを周知した上で、青少年の健全育成、地域社会の再生、心身の健康の保持・増進、社会・経済の活力の創造、我が国の国際的地位の向上に向け、スポーツの推進が行われる必要がある。さら

に、遊びの墮落は、スポーツのみの問題ではなく、国と国との争いにまでその本能の適用が広がることもカイヨワ（2013）で指摘されており、スポーツの推進の影響が波及する範囲はかなり広いものであることも同時に周知が必要であると言える。

### 注

- 1) この忠誠とは、「家族間あるいはコミュニティ間の対立や抗争を調停する公共サービス」（神野，2002，p 28）や「生活保障をする公共サービスの提供」（神野，2002，p 28）から得られる信頼と言い換えることができる。
- 2) 「プロスポーツは、勝敗を争うものであり、どちらが勝つのかを予想し、はらはらしながら観戦することに楽しみがある。実力差が大きく最初からどちらが勝つかわかっている試合を見に行く人は少ない。…このプロスポーツの特性を、ニール教授は、1930年代のヘビー級ボクサーのタイトルマッチにちなんで『ルイス＝シュメリングの逆説』と呼んだ。ルイスとシュメリングは、第二次大戦前のアメリカとドイツの代表的なヘビー級ボクサーであり、両者は36年と38年の二度にわたって世界タイトル戦で戦った（結果は一勝一敗）。両者の対戦は、当時の両国の関係を反映して人々の強い注目を浴びていた。それでは、ルイスがもっと強ければ、ルイスの人気はもっと高まって、彼はより高い所得を得られたのであろうか。ニール教授は、ルイスがもっと強かったとすれば、シュメリングと力が拮抗していた場合に比べてより低い所得しか得られなかったであろうという。あまりにも力の差があれば、戦いの行方は明らかになって対戦そのものがつまらないため、人々の注目を集めなかったはずだというのである。」（大竹，2007，pp 65-66）
- 3) ここでイリンクスは、アゴン、アレア、ミミクリと趣を異として、現実社会に影響する遊びの墮落は限定的であると指摘している。
- 4) スポーツの推進を起点とした高い競技性のプロスポーツを含む「見せるスポーツ」がスポーツにかかわる人々の価値規範（正義・規範意識）に与える影響の一つとして、アゴンの遊びの墮落の影響範囲の広さを次のような記述で明らかにしている。「個人の場合は、それでもなお、裁判所や世論を恐れて、行動を控えることがないではない。しかし、国家には、冷酷な無制限戦争を行うことが、賞賛されないまでも、許されるかのようだ。暴力に課されていた様々な制限は、廃止されてしまう、作戦行動はもはや国境、要塞地帯、軍人だけに限られなくなる。…今日の戦争は、…大規模な破壊と大量殺戮の中にこそ、その全容を表す」（カイヨワ，2013，p 105）

### 参考文献・資料

- 大竹文雄（2007）「2-1プロ野球における戦力均衡」『経済学的思考のセンス お金がない人を助けるには』中公新書
- 神野直彦（2002）『財政学』有斐閣
- 玉木正之（2001）『NHK 人間講座 日本人とスポーツ』日本放送出版協会
- ノルベルト・ヘーリング, オラフ・シュトルベック, (大竹文雄 その他, 熊谷淳子 (翻訳)) (2012) 「Chap 12 スポーツ選手をモルモットに—なぜ経済学者はスポーツ好きなのか」『人はお金だけでは動かない—経済学で学ぶビジネスと人生』NTT 出版
- マイケル・サンデル (鬼澤忍訳) (2010) 『これからの“正義” の話をしよう—いまを生き延びるための哲学』早川書房
- 文部科学省「スポーツ基本法（平成23年法律第78号）（条文）」[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/sports/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2012/02/09/1307830\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/fieldfile/2012/02/09/1307830_01_1.pdf)
- レイナー・マートン (大森俊夫, 山田茂監訳) (2013) 『スポーツ・コーチング学指導理念からフィジカルトレーニングまで』西村書店
- ロジェ・カイヨワ (多田道太郎, 塚崎幹夫訳) (2013) 『遊びと人間』講談社